

論文概要書

王維『輞川集』の研究

紺野 達也

本論文は、盛唐の詩人、王維（字は摩詰。七〇一以前？―七六一）の“代表作”とされる『輞川集』を研究対象とし、その表現や評価を中心に考察したものである。

現在、『輞川集』が王維の詩の“代表作”であることは疑いようもなく、さらには唐詩、中國古典詩における“代表作”の一つとして認められることもある。従來の研究、特に王維の文學全般や『輞川集』そのものの問題を考える研究において、王維が盛唐（あるいは唐詩、中國古典詩）を代表する詩人であり、『輞川集』がその王維の詩を代表する作品であるということは既に自明のことであつて、それを前提にして議論されることが壓倒的に多かつたように思われる。

しかし、少なくとも唐代、―それは王維の在世中も含めて、―『輞川集』は“代表作”として扱われるどころか、十分に認知されていたかどうかは実は疑わしい作品であつた。さらには、中唐後期以降、同じ輞川莊という園林を描いた繪畫の「輞川圖」が廣範圍で知られていたこととは對照的に、詩歌である『輞川集』はむろんのこと、輞川という地と王維の詩作を結びつけることさえ、表だつて行われることはほとんどなくなつていた。そして、『輞川集』への本格的な評價は北宋の後期まで待たざるを得なかつたのである。本論文は、このような『輞川集』の評価史・受容史、特に唐宋期の文人が『輞川集』という詩歌と園林・繪畫との關係をどのように考えていたかを考察した。

そして、北宋後期の文人、さらにはそれ以降の讀者が『輞川集』から看取した詩歌と園林・繪畫との關係こそ、『輞川集』という作品そのものを考えるにあつても、最も検討すべきことではなからうか。なぜならば、その關係が後世に見出されたことこそ、『輞川集』が王維の“代表作”にまで認められるようになった最大の要因の一つであると考えられるからである。したがつて、本論文は『輞川集』という詩歌と輞川莊という園林との關係はそもそもどのようなものであつたか、という問題を検討した。

つまり、本論文は『輞川集』における詩歌と園林との關係を考察し、さらに後世、特に唐宋期の文人がそこに繪畫を加えた關係を如何に見ていたかについて検討したものである。それは中國における「創作―受容―再創作」という文學史、文化史全體に關わる非常に大きな問題の一端を明らかにすることでもあつた。

以下、本論文の構成とその内容を示したい。

序章は「第一節 本論文の研究対象」「第二節 これまでの研究とその課題」「第三節 本論文の構成」「第四節 使用する王維の別集の版本」からなり、本論文における研究に必

要な基礎的事項を確認するとともに、本論文が何をどこまで明らかにし、いかなる獨創性を持つかについて説明した。

第一章「王維の詩と園林」では『輞川集』における詩歌と園林の関係を考えるための前提として、王維の詩歌と輞川莊以外の園林の関係について検討した。この関係が明らかになることで『輞川集』の特徴もより客観的なものになると考えられるからである。

第一節「終南別業」詩について―「輞川」に連なるものとして―では王維の園林での作品として、『輞川集』をはじめとする輞川莊における作品とともに著名である「終南別業」詩の諸問題を述べた。宋代の畫論にもしばしば引用されるこの詩は、『輞川集』とは異なり、王維の在世時には既に広く知られていた。

本論文では、まず二種類の宋版における「戲贈張五弟諍三首」の題下注に着目し、王維が長安の常樂坊に居住した可能性を指摘し、『長安志』や「盧氏雜說」などの記事、王維の母の崔氏の普寂への師事からそれを論證した。それによつて「終南別業」詩とは「長安城内の居宅から「終南別業」へ行き、そこでの隱棲のために元の長安城内の家へ歸ることがない」ことを歌つたものであり、輞川莊の作品との共通性があることを確認した。

次に終南別業と輞川莊が同一か否かという問題を検討した。本論文では、従來の方法とは異なり、長安から山々を望む詩にも着目し、王維が終南山と輞川という地名を使い分けていた可能性を指摘した。特に、王維は輞川莊における作品では「終南山」（南山）という語を積極的には用いず、それは王維の前の輞川莊の所有者である宋之問の手法とも異なることを明らかにした。さらに、王維が廣範圍でかつ、人々によく知られていた終南山ではなく、狭い地域であり、また當時はほとんど無名の存在であつた輞川の名をあえて用いることで、輞川を自分だけの隱棲の場所にしようとしたことが重要であると述べた。そして、この終南山から輞川へという王維の文學における過程を把握してこそ、輞川に連なる作品としての「終南別業」詩を本質的に理解できると結論づけた。

第二節「待儲光羲不至」詩について―初盛唐期の園林における詩人の交遊を中心に―では「待儲光羲不至」詩と儲光羲からの答詩に着目し、「友人と約束したが、その相手が來ない」という詩と園林の関係、特に園林における詩人の交流について考察した。

先行研究にもあるように、「友人と約束したが、その相手が來ない」という詩、つまり「期不至」詩は東晉の謝混に始まり、謝靈運が繼承した。本論文では、まずこれらの詩が園林で創作されたことを確認した。また「期不至」という詩題に着目し、六朝期、謝靈運より後には後繼の作品が見られないことを指摘した。

初唐の宋之問「見南山夕陽召鑿師不至」詩には六朝期と異なり、相手の特定化が見られた。孟浩然に至って「期不至」詩は約束の相手の名を記すという記名性を様式として得るとともに、それによつて定型化し、さらに盛唐期にはそれが一般的になつてもいた。また、その多くが園林の備わるような景勝地で作られたことを確認した。そして、詩人間の交往がより増加し、重要となつた盛唐期、相手や約束した場所を特定することは、内容が同一、陳腐になることを防ぎ、個性を獲得するために有効かつ簡単な方法であつたと指摘した。

王維の「待儲光羲不至」もその「期不至」詩の一つであり、儲光羲による答詩が存在する点で特に注目される。この答詩の出現は「期不至」詩の定型化、一般化に伴うものであつた。本論文は、この二つの詩は王維やその園林を含む邸宅が俗世とは對蹠的な位置にあることを示すとともに、そのような園林を含む邸宅を王維は實景表現、儲光羲は想像と、それぞれ別箇の方法によつて描寫していることを論じた。これらは今までの作品と異なり、詩を介した園林の交遊を保證していることから、このような方法は王維と裴迪の唱和による“連作組詩”の『輞川集』とともに園林における詩人の交流と詩作において劃期的なものであると考えられる。

第二章「輞川莊と詩」では輞川莊という園林と『輞川集』をはじめとするこの地で作られた詩歌、特にその風景を中心に考察し、『輞川集』という詩歌と輞川莊という園林との關係がどのようなものであつたかを明らかにした。

第一節「王維の輞川諸詠における田園の風景」では『輞川集』以外の輞川諸詠について述べた。王維の經濟的基盤でもあつた輞川莊で創られた詩には、入谷仙介氏が指摘するように、『輞川集』を除いて多くの田園の風景が描寫される。そして、田園の風景を描寫する王維の詩のなかでも輞川における作品が最も多い。本論文では、その輞川諸詠の田園の風景、特に單なる描寫の有無ではなく、その機能に着目した。

本論文では“田園風景”の描寫を「生産・農業活動に關わる行爲の描寫」「その活動の場として存在する村落・集落の描寫」と定義し、「輞川閑居」「積雨輞川莊作」などの作品を検討した。これらの詩には隱棲に關わる話や人物が見える。それゆえに、これらの作品は隱棲や歸隱への志向を持った詩であり、これらの田園風景の描寫は輞川の地を官僚の世界、つまり出仕の場である長安と明確に隔絶させ、その地を精神的充足を得る場、高い價值を持つ場であることを保證する機能を持つ、と指摘した。

さらに「贈裴十迪」などは輞川莊の作と斷定することはできないものの、これらの詩の田園風景も隱棲や歸隱の場所であることを示している。したがつて、これらの詩も輞川で

創られた作品である可能性が高いと述べた。

第二節『輞川集』における王維の風景認識―“遊止”の典故を手がかりに―では、王維・裴迪が五言絶句各一首を歌う『輞川集』の全二十箇所“遊止”の名称の典故を調査することで、王維が園林である輞川荘に認識し、『輞川集』として言語化した風景とは何か、を考察した。“遊止”の名称の典故の調査にあたっては、出典の確定にとどまらず、それらの典故と各詩の本文とがいかなる関係を有するのか、またそれぞれの詩の“遊止”やその名称の典故が相互にどのような有機性、関連性を持っているのかを系統的に考察した。

調査の結果、王維が輞川荘にて認識し、『輞川集』として言語化した風景とは「謝靈運の詩を主とする長江流域以南の風景」および『楚辭』を中心とする“楚”の風景であると指摘した。それは必ずしも、それらの作品の世界そのものの忠實な再現とはかぎらない。より正確に言えば、それらの詩題や表現から想起される世界をも認識し、表現している。いずれにせよ、その風景は『文選』を中心とする古典に表現された長江流域以南の風景であり、王維はそれを現実の輞川荘に認識した、あるいは主體的に見出した、と論じた。

つまり、『輞川集』の世界とは『文選』を主とする古典に表現された長江流域以南の世界を再現したものであった。本論文では、それは出仕の場である長安に代表される外側の世界と隔絶し、輞川を精神的充足が得られる場にしようとしたからであり、そのために容易には消失、崩壊しない、安定感を古典に求めたと推論した。

この「世界の隔絶」という意識は輞川諸詠における田園風景にも共通して確認される。次に両者の相違について考察した。『輞川集』のように典故を用いる方法は重層的に用いることでイメージがはつきりするために「連作組詩」が最適であり、一方、田園風景によって外側に隔絶するという方法は“都市”と“田園”の明確なイメージの対立のために『輞川集』のような「連作組詩」である必要はなかった。さらに、後者の方法は隔絶が相対的に弱く、もし、輞川荘という園林を詩歌という方法によって他の場所から完全に隔絶するには、輞川荘のすぐ外にも広がる田園風景を示す表現や誰もが知る隱棲の場であった終南山などの語を用いるのではなく、誰もが知らない世界、できれば架空の世界を創り上げることがより効果的であり、必要であったと論じた。本論文では、その世界こそ、古典の典故を用いることによって作られた長江流域以南の世界である、と結論づけた。

第三章「詩と繪畫」では、王維における詩歌と繪畫との関係について、従來の多くの論考にあるような王維の詩の繪畫性を検討するのではなく、新たな方法から論じた。その方法とは創作者としての詩人と畫家に着目することであり、特に詩歌における「畫家」の言

及とその意味について調査した。なぜならば、このような言及が北宋後期、士大夫による詩人と畫家が「文人」へと融合するための基本的前提の一つと考えられるからである。

第一節「唐詩における「詩人」と「畫家」―王維詩を手がかりに―」では、まず、王維「偶然作」其六に見える「詩人」と「畫家」の位置の状況を検討し、王維は少なくとも「畫家」としての自己を「詩人」としてのそれよりも決して下位に置いていないことを確認した。また「崔興宗寫真」「故人張謐工詩善易卜兼能丹青草隸頃以詩見贈聊獲酬之」を例に、王維が詩のなかで「畫家」に言及していることを指摘し、さらに一人物に詩人と畫家の両側面を兼備することが可能であると考えていたことを論じた。

そして、このように「詩人」と「畫家」を並置するような詩や「畫家」に言及する詩は唐詩にも稀で、かつ盛唐以降に現れている。特に王維と杜甫に複数の例があることに着目し、彼等が詩において「畫家」に言及した先驅者であることを明らかにした。

次に、そのように王維や杜甫が先驅者たり得た要因について考察した。王維の場合、個人的な趣味や生來の資質のみならず、年少期から現實の貴顯との交往における必要性もあって繪畫への造詣を深め、その結果、繪畫そのものを創作し、一方で詩において畫家に言及していったと考えられる。さらに、杜甫の場合は宮廷畫家の流出も考慮する必要がある。また唐代においては畫論の創出が繪畫鑑賞とともに文人の間に廣く行なわれたことも詩人と繪畫の距離を短くした。その一つの表れこそ文人の記した詩における「畫家」への言及ではないかと指摘した。

北宋後期以降、士大夫が活發に繪畫を創作するという現象を考えたとき、唐代はそのための搖籃期である。その唐代、王維が詩において畫家に言及した、詩人と畫家とを並置した最初の詩人の一人であることは、『輞川集』と「輞川圖」への評價の變遷と同様、北宋後期における詩畫合一の價值觀の形成と發展という文化史の問題に大きく関わっている。

第四章「『輞川集』の評價」では『輞川集』という詩歌と繪畫、園林の關係を唐宋の文人がどのように評價、受容したのかを述べた。宋代、王維その人や詩歌に對する評價は必ずしも高いものではなかったにもかかわらず、それまでほとんど論じられなかった『輞川集』が王維の“代表作”として認められるようになり、そこには詩歌と繪畫を一體のものとする認識が関わっていることを明らかにした。

第一節「唐代宗による「天下文宗」評について―王縉の『王維集』獻上との關係を中心に―」では、唐代において『輞川集』への評價がほとんど見られないことを考える前提として、杜甫の「解悶」詩其八とともに王維の没後、最初の王維評價とも言うべき文宗皇帝

による「天下の文宗」評と王縉による『王維集』の献上について、兩者の上奏文と答敕の内容を詳細に検討した。王縉の上奏文には王維の性格や日常について多く記述され、また佛教に関する記述もある一方、王維の文學、特にその内容についてはほとんど記されていない。しかし、これを承けて發せられた文宗の答敕はほぼ全篇にわたって王維の文學に言及し、逆に王維の性格や日常、佛教の記述はほとんど、あるいは全くない。そして、『王維集』献上をめぐるこの微妙な齟齬は代宗皇帝の王維の文學への個人的愛好とともに唐朝の權威への配慮によつて生じたことを指摘した。また、このような皇帝による別集献上の敕命は唐代において非常に特殊な例であり、そこには個人的な文學愛好だけでなく、文教政策上、個別の別集を収集する價值があるという判断も働いたと考察した。

さらに、「天下の文宗」評は、安史の亂以後の中央文壇の空白を埋めるために、朝廷において創作されるべきふさわしい文學の規範を示したものであることを明らかにし、前述の唐朝の權威への配慮もそこから生じたと結論づけた。これについては傍證として李白への左拾遺任官からも検討を加えている。

第二節「『輞川集』と「輞川圖」の唐宋期における評價の變遷—文人による詩畫評價の視点から—では詩歌『輞川集』と繪畫「輞川圖」の唐宋期における評價の變遷について述べた。この變遷はほぼ『輞川集』が王維の“代表作”となるまでの過程とも言えよう。

唐代においては、『輞川集』に直接、言及した例は確認し得ないが、王維とその文學が輞川莊という園林と關係があつたことについては、中唐前期までははつきりと意識されていた。しかし、中唐後期になると、詩人達はたとえ、輞川を訪れても『輞川集』はおろか、王維の別業であつたこともほとんど言及しなくなった。その理由について、本論文では「天下の文宗」評が王維の文學全體への評價であつて、中唐後期に文學の祖述の對象が變化した時、その全體の評價から『輞川集』が分離されなかつたことを論じた。また、「輞川圖」は、そういった評價とは直接に關係せず、しばしば畫論に言及されたことを指摘した。

北宋前期から中期には「輞川圖」を歌う詩が現れた。本論文は、特に輞川莊とは關わりのない園林において「輞川圖」が想起され、詩に表現されていたことに注意した。そして、このような當時の文人の詩から王維と輞川莊との關係への認識、王維の詩畫が卓越していることへの共通理解、「輞川圖」への關心の高さを確認した。さらにこれらの前提として、繪畫「輞川圖」の廣い範圍での流行、それをもとにして生まれた王維の園林における文雅な生活への文人の共感があつたことを指摘した。

つづいて、北宋後期の蘇軾と蘇門による『輞川集』の“再發見”という轉換について検

討した。まず、彼等は繪畫「輞川圖」を手がかりに詩歌『輞川集』へと連想し、言及していることを確認した。『輞川集』の特徴でもある「連作組詩」についても、唐代には『輞川集』を意識した作品はむしろほとんど見られず、やはり文同や蘇轍などの蘇門や彼等の生きた北宋後期に多く創作されていた。そして、このような踏襲あるいは模倣こそ『輞川集』への関心の高まりを具現化したものであることを指摘した。本論文は、その要因として北宋後期における詩畫を一體のものとする觀念を擧げた。つまり、當時の文人にとって、その觀念と行爲を擔保する過去の典型こそ、輞川莊という園林で創作された王維の詩歌『輞川集』と繪畫「輞川圖」であつたことを明らかにした。

この北宋後期の轉換を承け、南宋期、輞川は隱逸の風景を代表するものの一つとして一般化され、その結果、繪畫「輞川圖」を介することのない詩歌『輞川集』への言及が増加していった。そして、この長江流域以南の地にあつた南宋の文人は『輞川集』の風景のなかに憧れの理想郷を見出し、それゆえに『輞川集』を文人生活、特に園林における理想の生活を描いた作品とみなす觀念が普遍化したと結論づけた。

結語では、本論文でのこれまでの所論について改めて要點を整理し、本論文の論旨および今後の課題について論じた。なお、末尾に主要参考文献と初出一覧を載せる。

最後に本論文の研究を踏まえ、今後の課題を述べておきたい。

まず、問題にすべきことは宋末元初以降の『輞川集』への評價であろう。宋末元初以降の『輞川集』評價への考察は、本論文、特に第四章第二節の延長でもあるが、本質的に異なる部分がある。本論文がある文學作品が“代表作”となるまでの過程を論じたのに對し、宋末元初以降の『輞川集』評價を論じることは、すでに“代表作”となつた作品がさらにもどのように新たに讀まれていったのかを考えることになるからである。つまり、本論文を踏まえて宋末から明清期以降の『輞川集』の評價を研究することで、中國古典文學における受容・評價のなかでも“代表作”の再解釋という重要な問題を論じる契機になろう。

特に『輞川集』評價と佛教との關係は大きな課題となるだろう。劉辰翁の評にも見えるように、宋末元初以降、『輞川集』を佛教、とりわけ禪によつて捉えようとする動きが現れる。この動きを理解するには、まず宋末元初から明清期に至るまでの『輞川集』への評價の變遷を調査し、傾向を明らかにした上で、佛教的觀點からの論評について詳しく分析する必要がある。さらに社會史、思想史の情況も視野に入れつつ、詩歌評價と思想という文學史的問題の一つとして『輞川集』評價と佛教の關係を検討することが求められるだろう。